



SKIPシティ国際  
Dシネマ映画祭2010

映画祭・監督インタビューREPORT その1

『テヘラン』 ナデル・T・ホマユン監督インタビュー  
「デジタルカメラが捉えたイランの今」

映画祭・監督インタビューREPORT その2

『不毛の丘』 ロブ・キング監督インタビュー  
「時を超え、人間の尊厳とモラルを問うドラマが教えてくれたこと。」

映画祭・監督インタビューREPORT その1

『テヘラン』 ナデル・T・ホマユン監督インタビュー

**デジタルカメラが捉えたイランの今**

黒澤明をこよなく愛する、イランの監督がデジタルでとらえたテヘランの今

「SKIP シティ国際 D シネマ映画祭2010」で審査員特別賞に輝いたパリ在住のイラン人監督ナデル・T・ホマユンに、会期中インタビューすることが叶った。監督の長編デビュー作であり、すでにベネチア国際映画祭で国際批評家賞を受賞していた作品だが、人身売買など深刻な社会問題を扱い、イラン人の生き抜く強さを描き圧倒的な作品だった。この作品にかけた思いを聞いた。

「イランの人々は大変苦しんでいる」。

上映終了後のQ&Aで、監督はマイクを握ると真こう切り出した。1968年パリ生まれ、フランスの国立映画学校 La Femis で学んだイラン人のホマユン監督。パリ在住ながら年に2回は祖国イランに渡り、目まぐるしい変化を感じ取って常に「今」をアップデートしている。「文化、資源に恵まれながら、今も貧しいイランで人々はどう生き延びようとしているのかを伝えたかった」。インタビューではさらに深く“祖国への思い”を語ってくれた。

「“テヘラン”を撮りたい」気持ちも製作の動機になったというホマユン監督。人身売買を扱ったのは、「街中を撮影するために必要な“街のどこにいてもおかしくない主人公”を考えた時、赤ん坊を抱えた物乞いが思い浮かんだから」だという。検閲の対象となることを避け、“デジタルカメラによるドキュメンタリーの製作”を名目に、イラン当局より認可を取得。「結果、撮影期間は18日間と極めて短く制限された」と振り返る。スタッフも少人数。「群集は映画を撮ってるなんて知らない。非常にリアルな情景が撮れた」という。出演者も駆け出しの俳優を使い、人目につかないよう、1シーンに1時間半以上かけることはしなかった。撮り終えればすぐ移動。まさに、デジタルカメラあってこそこの“ゲリラ撮影”だったと言える。

映像は臨場感に溢れ、一見ドキュメンタリーのように。しかし、今作はあくまでフィクションだ。「これは70年代のイランの映画人へのオマージュでもある。舞台はテヘランでも庶民的で、貧しい人々が集まる南部。キャバレーやアラク（中近東などで飲まれる蒸留酒）、喧嘩する人々などが集まる混沌とした雰囲気再現してみたんだ」と語る。

「実はこういう風景はイラン革命（1979年）以降なくなってしまった。でも、この作品には70年代の雰囲気を取り戻すことが必要だったと思う」

今作は原題を『Tehroun（テヘルーン）』という。これと「テヘラン」との関係は、日本でいうところの「江戸」と「東京」といったところ。まさに“テヘランの今と昔”だ。「テヘランはイラン全土の縮図だ」という監督の持論でいくと、観客は映画を通してテヘランの、ひいてはイランの人々の“生き抜く力”を目撃することになる。

インタビューに答えるというより、まるで物語でも語るように話すホマユン監督。その表情が一層輝くのは、黒澤明監督作品についての話題だった。

「僕はイランで最初の、黒澤監督に関する書籍の翻訳者なんだよ」と、ちょっと得意気に、にっこり。18歳で黒澤映画に出会い、作品はすべて看破。その翻訳著書はなんと、イラン映画の巨匠アッバス・キアロスタミ監督の手を経て日本に渡り、生前の黒澤監督本人に届けられた。世界に数多いる黒澤ファンを語る映画人の中でも、実に群を抜いている。そんなホマユン監督の「夢」は、黒澤監督の『野良犬』をいつかリメイクすることだ。



次回作には『オフサイド・ガールズ』などで知られ、今年のカンヌ国際映画祭の審査員に決まっていたが、イラン当局に拘束され渡仏が叶わなかったことで話題になったジャファール・パナヒ監督に関するドキュメンタリーが控える。その後は、フランスでの新作撮影も予定。こちらフランスとイランとの関係を描くものになるそうだ。フランスを拠点に、祖国イランの姿を真摯に見つめた映画作りを続けながら、黒澤作品のリメイクに意欲を燃やす。真の国際的映像の作り手として、この映画祭をも踏み台に、さらなる飛躍を予感させる大きな力を感じた。

お父様はテヘランに関する著書を持つ歴史家。監督の知的な語り口に思わず納得。  
／写真 Rie Nitta

## 『テヘラン』

監督 ナデル・T・ホマユン／出演 アリ・エブダリ、サラ・バーラミ、ファルジン・モダデスほか／  
2009年／イラン、フランス／95分



テヘランに出稼ぎに来た主人公イブラヒムは、同情を得るため借りてきた赤ん坊を抱いて物乞いをしている。夢見た街の豊かな暮らしとはかけ離れた厳しい現実には耐える日々。ある日、公園で出会った女性に大事な赤ん坊を連れ去られ.....

©Avenue B productions

(取材・文) 新田理恵／巴里映画 CINEMA SCHOOL 「映画ライター養成講座」受講後、映画に関する取材執筆に関わっている。2010年カンヌ映画祭にもプレスとして参加。

## 映画祭・監督インタビューREPORT その2

『不毛の丘』ロブ・キング監督インタビュー

### 時を超え、人間の尊厳とモラルを問うドラマが教えてくれたこと。

カナダのTVシリーズなどを中心に、NHKとカナダの4 Square Productionsの共同製作によるドキュメンタリー「セミパラチンスク18年後の現実～カザフスタン核実験場跡～」(09)でもメガホンを取るなど幅広い活動を続けるロブ・キング監督に、今年のトロント国際映画祭でも上映された本作への思いや撮影の裏話を伺った。

『不毛の丘』は、50年代半ばのカナダの田舎町を舞台に、いわれなき偏見と貧困の中で自分を見失わずに生き抜く少年の姿を細やかな演出で描いたドラマだ。

脚本家の方と映画化に際し15年間温めた企画ということだが、この原作に惹かれた点を、まず聞いてみた。

「まだ少年である主人公が、疎外感に苛まれながらも強い道徳心を持って、自分の道を切り開いていくことです。そして自分の信念を貫き、周りの人間や彼に偏見の眼差しを向ける者までさえも変えていきます」と、キング監督。

原作者のジョージ・リガという作家は、カナダではかなり知られている作家なのだろうか。

「現在は一部では忘れられた存在ですが、彼の『リタ・ジョーのよろこび』(カナダ戯曲選集・下巻 99年/彩流社)は、カナダ人が書いた戯曲としてカナダを代表的な作品。集団による様々な偏見や差別による悲惨さ、無意味さは、彼の作品に共通するテーマです」

と教えてくれた。

「自分には存在する価値がない」と自問する主人公たちの物語だったのだが、困難にぶつかりながらも、やがてそれとは対照的な生き方を選択していく。自分の中にモラルを築き始めたスニットと絶望を憎しみに転化させていくジョニー。観ていて、ふたりを演じたケール・ギルクライストとアレクザンダー・デ・ジョーディの目力の演技に惹きつけられっ放しだった。どの様な演出をしたのだろうと尋ねたら、

「秘密です(笑)。第一にはキャスティング。オーディションで、わたしはケールのやさしく内向的で、時折見せるどこか、老人ではないですが精神的に成熟した人間を思わせる表情に惹かれましたね。アレクザンダーについては、以前テニス選手だった彼の情熱的な雰囲気印象的でした。撮影期間が18日と短かったため、それぞれの役について何度も話し合いました。そしてこれは偶然なのですが、彼らは同じ学校に通う親友同士だったのです。しかもオーディションをしている間、その過程を記録するという学校の課題で、そのパートナーでもあったのです。当時、まだ16、17歳だった彼らは、撮影に入ってから互いに競争心を燃やしていました。私にとってはそれもラッキーなことだった。プラスになりましたね」

と、いろいろなヒントをくれる。

主人公たちの絶望、孤独感を際立たせている美しい映像が素晴らしく、アンセル・アダムスの風景写真を彷彿とさせた。撮影には最新のRED ONEカメラを使ったという。スティーヴン・ソダーバーグ監督が『チェ 28歳の革命』などで使用したことでも知られる。

「わたしも撮影監督もアダムスの大ファン。RED ONEは撮影監督が提供してくれました。実は、私の地元でありロケ地でもあるサスカチュアンで開発された機器なんです。編集スタッフも扱いに慣れていたし、

フィルムと違い撮影クルーが少なくて済むなど、本作のような低予算の作品にはもってこいでした。今回夜間の撮影が多かったのですが、映像の明るさには驚かされました。おかげで美しいものを撮ることができました」

少年の大人への成長、いわれぬ差別と偏見、孤独と絶望と憎しみ。そして、人間の道徳心について。この作品は様々なテーマが詰まっている。たくさんいただいた監督の言葉が頭の中を反芻した。

「主人公スニットは、自分自身に、叔母に、自分が住む土地に、自分を取り巻くものにすべてに誠実であったから、周りの人々の心を動かしたのです」と語ったことを一番に心にとどめたいと思う。

そしてこの作品は私に、「モラル＝道徳」ということを改めて認識させてくれた。また、普段、気軽に使っているその言葉の意味と、「自分の存在価値」に気づかせてくれた貴重な映画であったとも思う。

このことは、実際にインタビューしたからこそ気づかせていただいたのである。監督とこの映画祭に感謝したい。



映画祭効果もあって、終始フランクに話したり撮影に応じてくれたロブ・キング監督。  
写真/ Miwa Shirai

### 『不毛の丘』

監督 ロブ・キング／出演 ケール・ギルクライスト、アレクザンダー・デ・ジョーディほか／  
2009年／カナダ／92分



精神を患った父が自殺したことで少年院に入れられたスニットが、2年振りに故郷に戻ってくる。しかし、彼が目にしたのは精神病への変わらぬ周囲の偏見を受け、絶望の淵を漂う叔母の姿だった。彼は同じ様に孤独と絶望を抱える少年ジョニーとともに密造酒を売り始めるが...

©Hungry Hills Production Inc.

(取材・文) 白井美和／巴里映画 CINEMA SCHOOL 「映画ライター養成講座」受講後、映画に関する取材・執筆に関わっている。